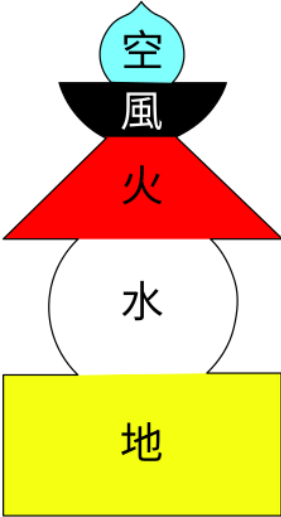


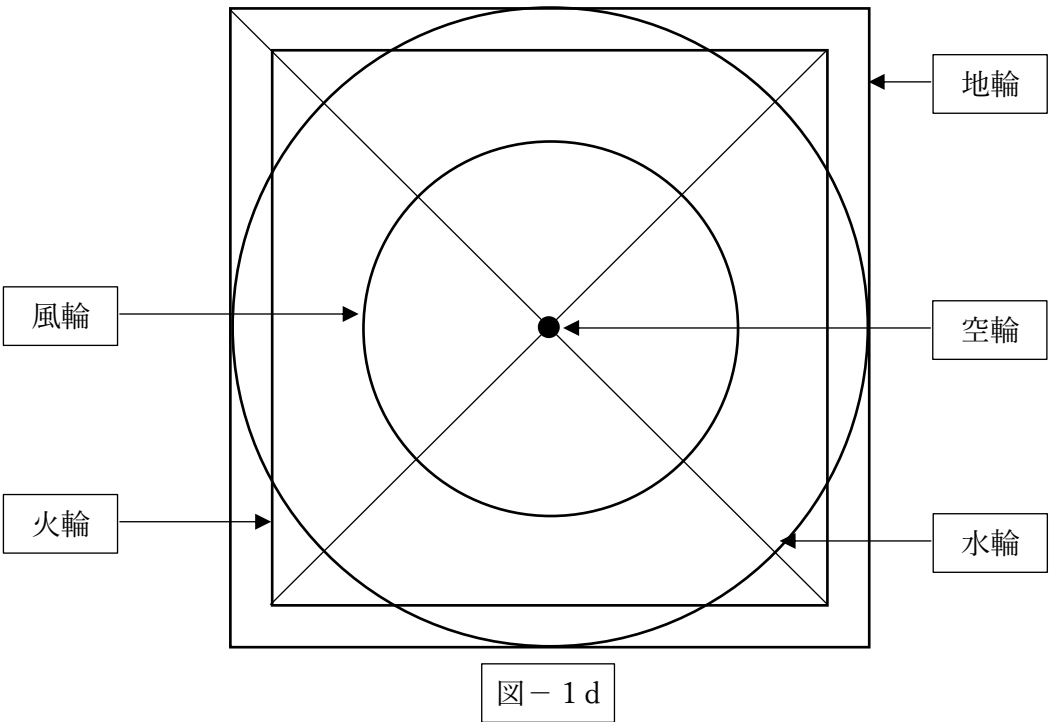
五輪・光明真言と宝篋印塔のこと

図-1 abc は、ネット内諸資料を参考に基本について簡潔に記述する。

1. 五輪塔のこと

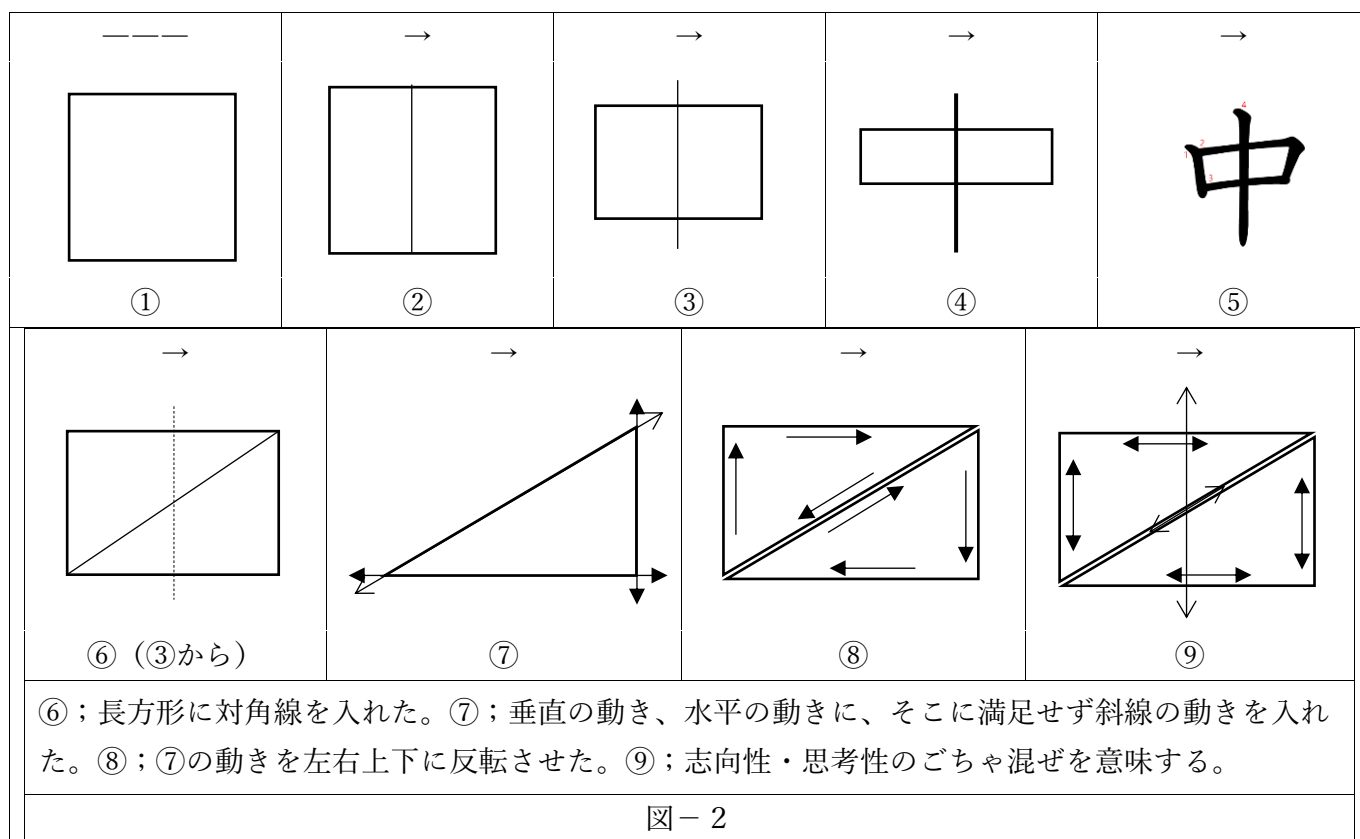
(奈良市西大寺奥の院)	一般的構成		構成の根拠	(参考/五行)
		宝珠	天空	大日経疏卷十四 秘密曼荼羅品十一に 「地、輪西方 水、輪円 火、輪三角 風、輪 半月 最上虚空、作一点」とあるとい う。
		半円	風	
		三角	火	
		円	水	
図-1 a	図-1 b	四角	地球	日
				木 火 土 金 水
				月

夙田嘉一郎著「宝篋印塔の起源 続五輪塔の起源」(綜芸舎) P120 に五輪塔を平面的にデフォルメすると図-1 d のように描けるとある。三角の火輪がなぜ正方形なのかという、書かれてはいないが、三角を二つ合わせると四角形になる、四角形は二つの三角形に分解できるということから来ているのだろう。なぜ、これは円の方形化(円と等しい面積の方形を作れるかという数学上の歴史的問題)が発想の原点にあったようである。なお、幾何学的な形を定義できるのは最小で三角形である。



そこで、私の推論（仮説）を記述する。 老子等による陰陽の原初においては「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずる。（よって、被生成万物の最初が四となる。）」と数字の自然数に重ねている。一方、易経は、陰陽の発展段階に生まれ「易に太極あり、これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八 卦^{け(か)}を生ずる。」と数字の累乗で生み出している。すなわち、陰陽二元の自然数適用の思想をより複雑・高度に止揚を図ったものである。老子の「二」は易の「両儀」に相当することからは「四象」が被生成万物の最初の数値となる。混沌の何もかもが統合されたものを「一」とするならば、そこが生成した最初の形のあるものは「四」ということになる、重要な基点の一と四を合わせた五に対して、宇宙成立の要素で置き換えた——組み立て直した時の五大要素が「地水火風空」となったということだろう。

ここで浮かんだのは「中」のこと、娑婆界の安っぽい妥協・打算のことではない。とても厳粛な真理の一点を指す究極の平衡点「中」である、中心の中、中間の中である。世の中の指揮者はみな「要はバランスである。」と豪語する、ならば、図-2のとおりの中の象形的構造からは、偏った、固執した、拘泥した思想信条をご破算すべきである。



2. 光明真言のこと

図-3は、岩波は石行寺境内の光明真言塔である。円周に沿う形の刻字は同真言——おん あぼきや べいろしゃのう まかぼだら まにはん どま じんばら はらばりたや うん——の23文字のいわば短い御経であるが、ここで着目するのは真ん中の五つの文字である。これは、大日報身五字真言（ア・ビ・ラ・ウン・ケン）



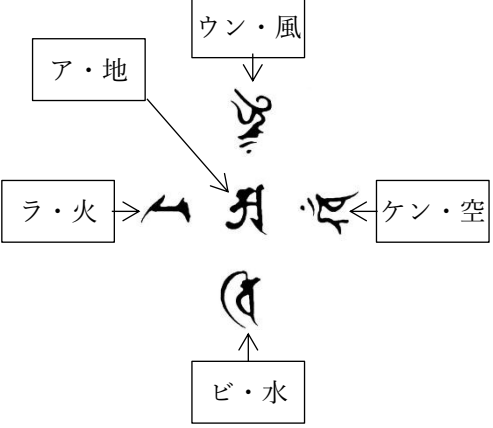
図-3 a



図-3 b

は、五つの梵字は地・水・火・風・空の五大種子を意味し、頭から順に、向かって中央・下・左・上・右に配置したものである。いわば、23文字を簡略化、統合縮減化したみとになる。

祈願祈祷において、一般的な冒頭の真言としては、「オン アビラ ウンケン バサラ ダト バン」と唱えるが、オンは皈依する、アビラ ウンケン¹は胎蔵界大日如来を、バサラ ダト バンは金剛界大日如来を意味する。アビラウンケンの字母は五大（アバラカ²キヤ）である。

―――	ここのもの	真ん中の梵字の意味
内向き	外向き	
		
https://shouryuji.ti-da.net/e8492792.html	https://twiman.net/user/1337015195244228609/1398243709401985027	
図－4 a	図－4 b	図－4 c

大日真言	ア	ビ	ラ	ウン	ケン
五大	地	水	火	風	空
五輪塔					
字母	ア	バ	ラ	カ	キヤ
図－4 d					

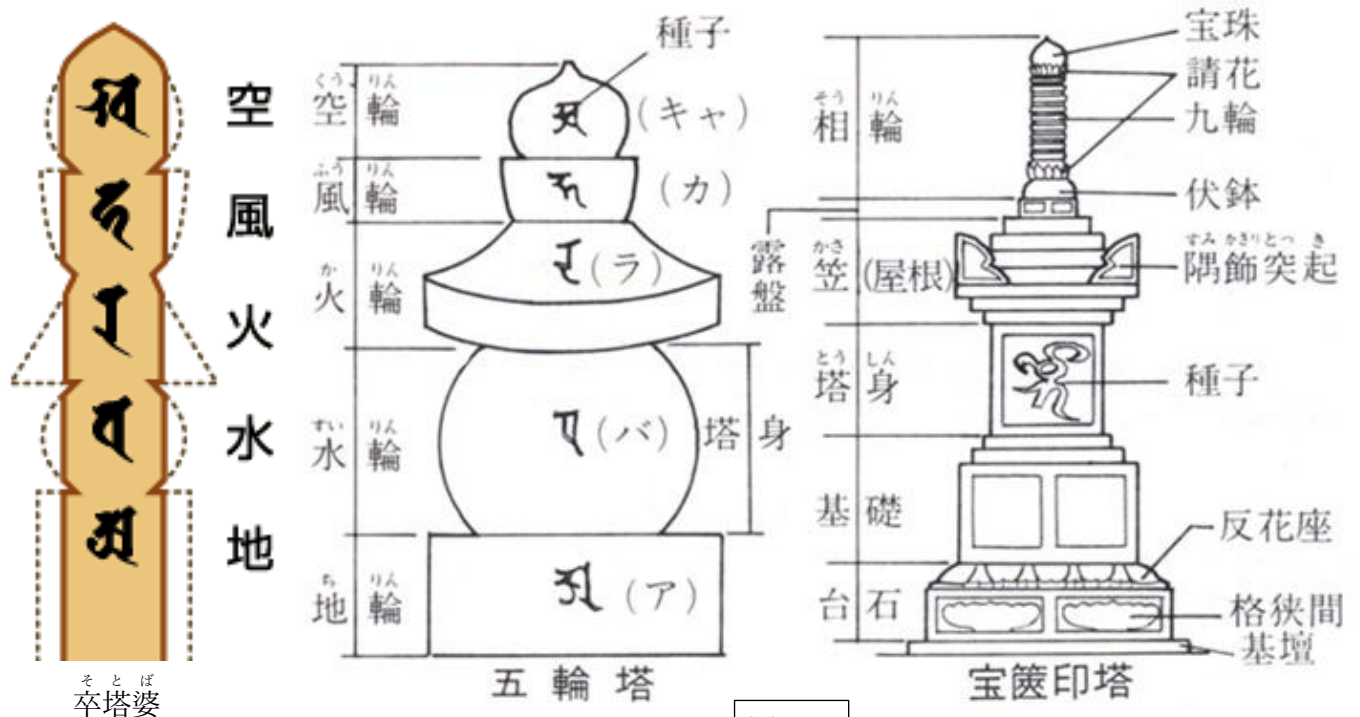
ここにおいて、「五大」と「五輪塔」と「大日真言」が重なって来た。

3. 宝篋印塔のこと

密教における宝篋印塔は、内部に『宝篋印陀羅尼經』という經典を収めた塔であることから、こう呼ばれている。『宝篋印陀羅尼經』には、一切の如来（さとりを開いた仏）の功德を念じ込めた呪文（陀羅尼³）が印され、これを収めた塔を礼拝することによって、罪を消滅し、生きている間は災害から逃れ、死後は極楽に生まれ変わると説かれている。日本での宝篋印塔の信仰は古く、飛鳥時代から始まったとされる。古くは木製の遺品が伝えられているが、石造の宝篋印塔が作られるようになったのは鎌倉時代になってからである。しかし、この時代以降は本来の目的とは違って、公家や武士の墓塔あるいは供養塔として立てられることが多くなったという。

（1）宝篋印塔の形

基本形図－5のとおり、よく比較される五輪塔と並べて記載する。一番上には「五重塔」などと同じ形の相輪、次に階段状の屋根がありその四隅には耳飾という装飾がある。この相輪と屋根・耳飾の形が宝篋印塔の特徴を示す部分である。中央の塔身には、種子（一字で一つの仏を表すインドの文字）が刻まれ塔の最も大事な部分である。下段は基礎と呼ばれ銘文（碑文）が記されている。



図一 5

(2) 宝篋印塔に刻字する梵字

千々と和到著「板碑と石塔の祈り」(山川出版社)を参考にする。宝篋印塔においては、多くは金剛界曼荼羅の5仏の大宇宙が象徴される。塔自体を大日如来と見なし、塔身その周り四方には4仏を刻み、その基本形配置は図一6である。なお、塔自体を移転して向きが変わっている場合が多々ある。

以下説明は、ネット「精選版 日本国語大辞典」を参照する。

五仏とは、真言密教は両部曼陀羅の法身大日如来と、如来から生じた化身の四仏を合わせていう。金剛界では、中央に大日如来、東に阿閼如来^{あしゅく}、南に宝生如来^{ほうしょう}、西に阿弥陀如来^{ふくうじょうじゅ}、北に不空成就如来を配置する。宝篋印塔においは中央に配置する大日如来は塔自体に対応させる。

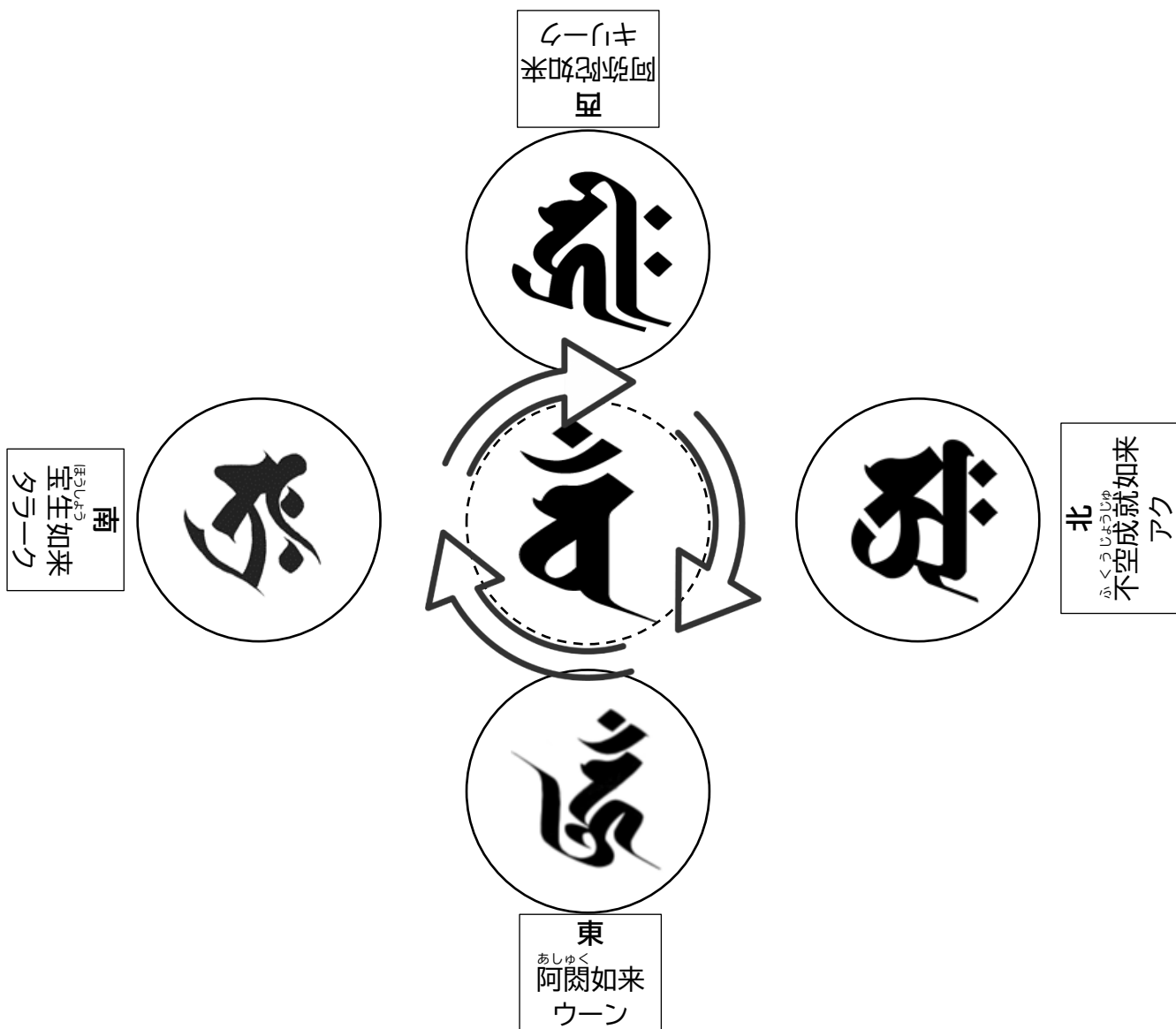
塔をピボット(回転軸)に、東面を人が拝礼する時の正面ーよって、人は西を向くとし、基礎部の銘文はここから始まる、つまり碑文の始まりは東面に刻むこととなっている。文章は右回りに、東(始まり)→南→西→北(終わり)へと刻字する。

宝篋印塔においては、右回りに宝篋印陀羅尼を唱えながら七回廻るとご利益が得られるという信仰がある。

基本配置を見ると、まさに《歴史&宗教 No022》に記述した密教曼陀羅の世界と同値同相となり、当然のことである。なお、時代変遷や地域によっては一部の種子を入れ替えているとのこと。

宝篋印塔の五つの梵字と「五大・五輪塔」の五つの梵字は異なることになる。

金剛界曼荼羅の基本形配置である。

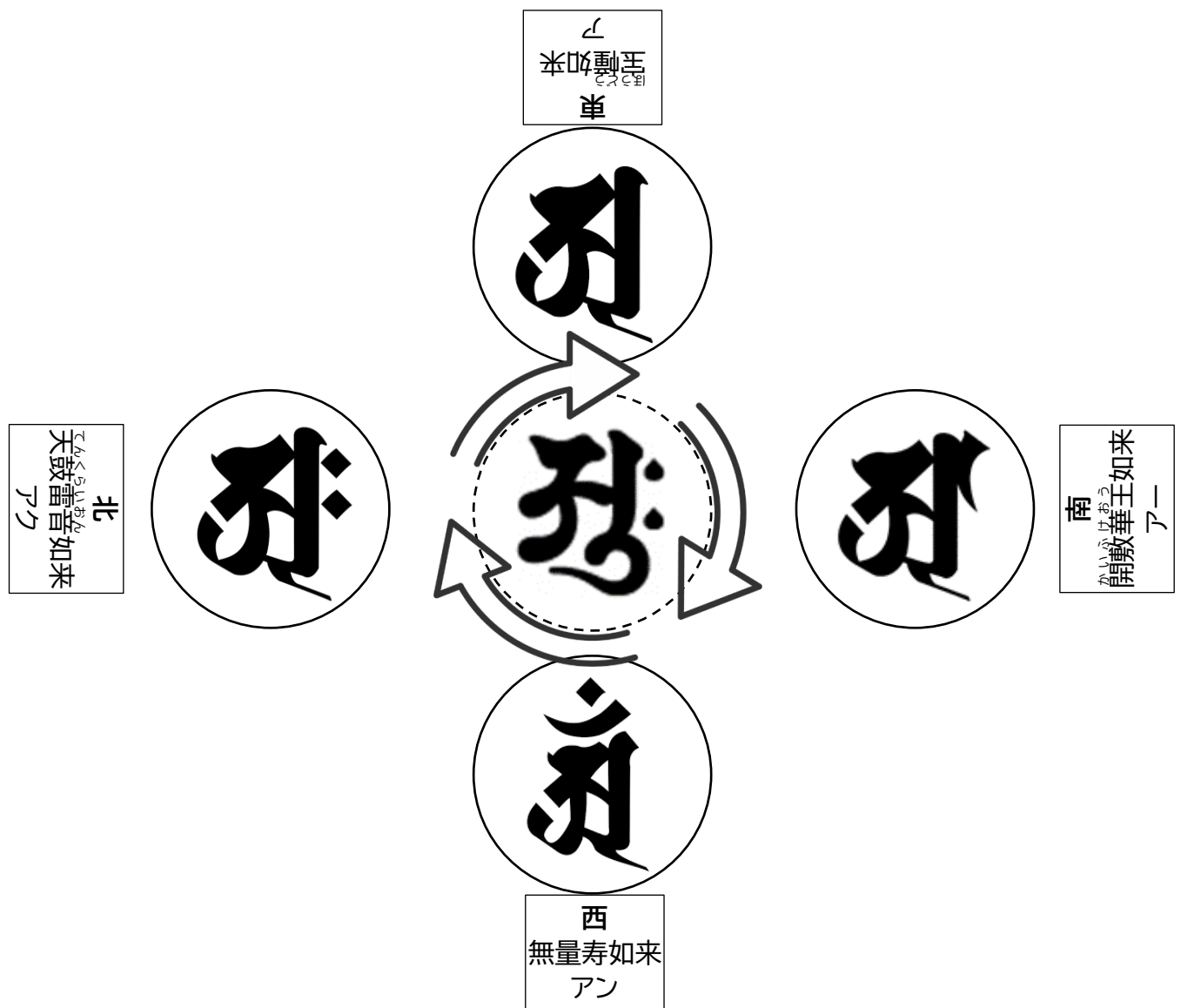


図一 6



(or) ウーン

胎藏界曼陀羅五仏（４仏）の基本形配置は図－7のとおりである。



図－7

(end)